

年間第19主日

福音朗読 ヨハネ6・41-51

2024.8.11 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
昌川信雄神父(クラレチアン宣教会)

### 「神の子になる道」

ミサの始めに、「平和をいただくために、私たちが自我で生きる限り、決して平和はあり得ない」と言いました。

「自我」とは。皆さん、要理を思い出してください。私たちは神様から造られたときに、神の子として永遠の命を生きる恵み——<sup>せいちょう</sup>聖寵と言います——を戴いていましたが、<sup>じんそ</sup>人祖の<sup>ださい</sup>墮罪によってその聖寵を失くし、樂園から追い出された状態で、サタンが支配するこの世で今、神の子ではなく、サタンの子になり下がっていることに気づいている人は少ないのです。この私たちが再び神の子に戻るためには、聖霊に助けられるしか道はありません。なぜなら、聖寵を失った私たちの本性は、自己保身と自己中心性、つまりエゴイズムという自我であり、自我はサタンの<sup>すみか</sup>住処であるからです。

私たちが自我で人と関わる時、戦争になり、共に滅びに向かうのは、それは自我の内です。その人をコントロールしているサタンの仕業であり、それが悪魔の狙いだからです。

それゆえ、私たちが敵と関わる時、本当の敵は人間ではなくて、人の背後でその人をコントロールしている悪霊との戦いであることを知らなければなりません。

レジオマリエというグループがあります。このグループはローマの軍隊の名を使っているので、皆さん敬遠する人がいるんですけど、それは、あの軍隊の統率された従順と規律の正しさを、神の子どもとしての従順の見本にしたいからであって、レジオマリエは人から武力で勝ち取るための軍隊ではありません。聖霊の人である聖母マリアにならって悪霊と戦う戦士たちなのです。

悪霊との戦いに、自我は禁物で、信仰者は聖霊で対峙しなければなりません。聖霊を戴くために自我に死ぬのです。悪霊は聖霊に出会うと自分の敗北を悟ります。そして、道は二つに一つ。悔しいけど回心して救われるか、開き直って滅びに至るか。悪霊は滅びの道しか持っていないので逆らって滅んでいくのです。

イエスさまは、十字架に上った時、人から「お前が神なら降りてみよ」とばかにされながらも、自我に死ぬために、誰からも神であることを知られないまま、

天を見つめて死を受け入れました。この時、槍で突き刺した兵隊が「この人はほんとうに神の子だった」と知るのです。そして回心して救いに至ったことでしょう。

今日の福音でイエスさまが「私は天から降<sup>くだ</sup>ってきたパンである」(ヨハネ 6・41)と言われた言葉につまずいたユダヤ人たちにイエス様は言われます。「私をお遣わしになった天の父が引き寄せて下さらなければ、誰も私のもとへ来ることはできない。『彼らは皆、神によって教えられる』」(ヨハネ 6・44)と。神さまを認めるのは聖霊の働きであると言っておられるのです。

ルルドで奇跡を<sup>ま</sup>目の当たりにした科学者アレクシス・カレルは、回心後、自著の本の中で告白しています。「知識で神を知ろうとする者に、神は遠ざかり、心に愛のある人には、神自ら近づかれる」と。

また、現代の啓示を「聖書で十分。必要ない」と受け付けない人の心をイエスご自身が指摘しています。「彼らがなぜ私の啓示を拒否するのか言おう。それは彼らの中にわたしの聖霊が働いていないからだ」と。

気をつけましょう。聖霊によって導かれなければ、私たちは神さまの救いの道を見出せません。司祭である私自身も問われています。知識でもって信者から尊敬されても、救いは知識ではありません。司祭にも聖霊が働いていなければ福音は伝わらないでしょう。

神の子に戻るためにも、すべては聖霊をいただくことです。どんなにあがいても自分の力で私たちは神の子になることはできないのですから。

キリスト教は困難な宗教だと言われます。世の御利益<sup>ごりやく</sup>を与えてくれる言葉がなく、世の富、自我を捨てることを教えるからでしょう。

かつて私の母の友達は、ミサの中で献金袋が回ってくるのを嫌って、教会を離れ、商売が儲かり、金持ちになるとすすめられた御利益宗教に変わってしまい、母を誘いに家に来て「あなたね、こんな貧乏くさい宗教やっていないで、金持ちにしてくれる私の宗教に来なさい」と勧めていました。母は無学な人ですが、こんなことを言って断っていました。「私はカトリックに居ながら信仰を全う出来ないでいるのに、今、他の宗教に行って勤まるでしょうか？ 今は、志した宗教を極めるべきですから」と。私はこれを聞いて。「ああ、母は聖霊に導かれていたんだなあ」と母を尊敬しました。

さて、かつて神さまが、ご自分が創造された世界の中に来られる決意をなさった時、イエスさまは、神さまとしてではなく、被造物の姿で来られましたね。それは、ご自分を神だと知ってもらうためではなく、人々が父である神さまの愛を知って、再び「神の子」となる道をご自分の生き方（十字架の道）で、私たちに示すためでした。

十字架の道とは、自我の服を脱ぎ捨てて聖霊の服に着替えることです。

私たちは父と子と聖霊による洗礼によってこの聖霊の服をいただきましたが、自我の服を脱がないままこれを着ることはできません。洗礼を受けるとは、サタンの住処である自我に死んで、再び神の子とされる聖寵をいただくことですから。

体をコップにたとえるなら、コップに自我がいっぱいになっている時に、いただいた聖霊は入ることが出来なくて外にこぼれてしまいます。こぼれても、私のためにくださった聖霊ですから、いつでもその聖霊は私のために待っています。コップが空になって私の中に入ることを。

だから私たちキリスト者の真の仕事は自分の自我、エゴイズムに死ぬこと、エゴに死んで聖霊を受け入れ、神と人を愛する人になることに他なりません。

イエスさまは「このために私はしるしとなって来ました」と言われました。

ところが政治的な夢の実現を期待していたユダヤ人には、イエスさまが示す奇跡、しるしは、彼らのお腹を満たしてくれる徴でしか見えなかったようです。彼等に見える世界に幸せを捜している「宗教的な人」たちでした。宗教の形式に携わってはいるが心で神と繋がっていない人たち、自分は神を信じていると言いながら、神が現れたときに神さまを殺してしまうことになる人たちです。

「自我に死ぬ」ことによって神さまの霊をいただいて神さまの子どもにしてください、これがキリスト教の救いです。このことを心いたしましょう。洗礼によっていただいた掛け替えのない恵みは無駄にして聖霊を悲しませないようにと、今日、パウロは私たちを戒めているのです。せっかく神の子に戻されたその「聖寵」を、自我に生きてまた失くしてしまわないように。「外の暗闇で歯ざりするであろう」という神不在を体験する人にならないために。

私たち洗礼を受けた信仰者とは、救い主イエスに会って、イエスが与える食べ物、ご聖体をいただく人々です。イエスさまを食べた人はイエスさまのようになります。

クリスマスの馬草桶まぐさおけを見てください。あれは、牛や馬がご飯を食べる茶碗です。「私を食べてください」と言っているのです。イエスさまを食べた人はイエスさまのようになる。それは、自分よりも他人ひとを大切にする人です。

だから、今日ご聖体をいただくときにイエスさまのお母さんであるマリアさまにお願いしましょう。「自我に死んで、自分よりも他人<sup>ひと</sup>を大切にする人になりますようにしてください」と。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>